三奏本「金葉和歌集」の「詞書」の語彙について

若林俊英

一

本稿は、三奏本「金葉和歌集」の詞書・左注（以下、「三奏金葉詞書」と略称する）の自立語語彙に関して、その使用実態をいささかまとめたものである。

「金葉和歌集」は、白河院の下命により源俊頼が編纂したものであるが、周知のように、初奏本、二度本は却下され、三奏本が中書本のまま嘉納された。しかし、世間には二度本が流布し、一般に「金葉和歌集」とは、二度本を意味していたようである。(1) このような事情もあり、筆者も、かつて二度本「金葉和歌集」の詞書・左注（以下、「金葉詞書」と略称する）の自立語語彙の使用実態についてみたことがある。(2) しかし、世間に流布しなかったとはいえ、「金葉和歌集」の終稿本は三奏本であり、三奏本系統の本の詞書・左注（以下、「詞書」と略称する）の語彙の使用実態をみることもそれなりの意義が存するであろうと考える。本稿では、主として「金葉詞書」およびその前後の「後拾遺和歌集」「詞花和歌集」の「詞書」（以下、それぞれ「後拾遺詞書」「詞花詞書」と略称する）の語彙の使用実態と比較することにより、「三奏金葉詞書」の特色の一端について考えることにする。

語彙調査をするに当たっての単位語の取り方については、宮島達夫氏編『古典対照語い表』（昭和四六年九月、笠間書院）における認定基準に、おおむね依拠した。また、本文は、川村晃生・柏木由夫・工藤重矩氏校注『金葉和歌集　詞花和歌集』（新日本古典文学大系9　平成一年九月、岩波書店）に付載する、三奏本『金葉和歌集』（底本は、伝後京極良経筆本。『新編国歌大観』により補訂）によった。なお、以下、語数に関しては、特に注記しない限り、異なり語数とする。

二―1

「三奏金葉詞書」の異なり語数・延べ語数は、それぞれ九九一、四

○九七となる。また、平均使用度数は四・一三となる。この四・一三という数値は、かつて調査した「詞書」[3]における同様な数値と比較すると、「古今和歌集」「後撰和歌集」「千載和歌集」「新古今和歌集」の「詞書」（以下、それぞれ「古今詞書」「後撰詞書」「千載詞書」「新古今詞書」と略称する）および「後拾遺詞書」の語彙におけるそれよりも相当低く、「拾遺和歌集」の「詞書」（以下、「拾遺詞書」と略称する）および「詞花詞書」の語彙におけるそれよりは高いものであることがわかるが、これは、「金葉詞書」における場合と同様である。ただし、「金葉詞書」における数値が「古今詞書」におけるそれと近似していたのに比し、「三奏金葉詞書」におけるそれは、「拾遺詞書」における数値に近似しているという点で相違がみられる。

2

次に、用語の類似度の面から、「三奏金葉詞書」および「金葉詞書」の語彙についてみることにする。

類似度については、さまざまなものが存するが、ここでは、水谷静夫氏が示された計算式による、類似度D'[4]でみることにする。

表（1）は、「三奏金葉詞書」「金葉詞書」の語彙と、その前後の「後拾遺詞書」「詞花詞書」および「千載詞書」のそれとの類似度D'についてまとめたものである。この表（1）からは、当然のことながら、「三奏金葉詞書」の語彙と「金葉詞書」のそれとの類似度D'の高さがみてとれる。と同時に、注目すべき点は、「三奏金葉詞書」の語彙と、前後の「後拾遺詞書」「詞花詞書」の語彙との類似度D'の値が、「金葉詞書」と「後拾遺詞書」「詞花詞書」におけるそれよりも、わずかではあるが高いということである。ここに二度本「金葉和歌集」の革新性と、三奏本「金葉和歌集」の保守性―和歌史の流れから大きく逸脱しない編纂態度への回帰―をみてとることも可能であろう。

表（1）

	後拾遺	詞　花	千　載	三金葉
金　葉	0.821	0.803	0.831	0.953
三金葉	0.826	0.814	0.831	

3

次に、「三奏金葉詞書」の語彙の語種別、品詞別構成比率についてみることにする。

表（2）は、「三奏金葉詞書」の語彙における語種別、品詞別異なり語数・延べ語数と、それぞれの比率をまとめたものである。また、表（3）は、「金葉詞書」の語彙に関して同様にまとめたものである。この表（2）・表（3）からは、二作品にお

表（2）

	所属語数	語種別語数			品詞別語数								
		和語	漢語	混種	名詞	動詞	形容	形動	副詞	連体	接続	感動	句等
異計	991	764	186	41	666	246	36	12	21	7	0	0	3
	%	77.1	18.8	4.1	67.2	24.8	3.6	1.2	2.1	0.7	0.0	0.0	0.3
延計	4,097	3,540	450	107	2,447	1,483	75	29	46	14	0	0	3
	%	86.4	11.0	2.6	59.7	36.2	1.8	0.7	1.1	0.3	0.0	0.0	0.1

表（3）

	所属語数	語種別語数			品詞別語数								
		和語	漢語	混種	名詞	動詞	形容	形動	副詞	連体	接続	感動	句等
異計	976	765	165	46	655	238	37	13	23	7	1	0	2
	%	78.4	16.9	4.7	67.1	24.4	3.8	1.3	2.4	0.7	0.1	0.0	0.2
延計	4,218	3,738	378	102	2,499	1,541	77	26	56	16	1	0	2
	%	88.6	9.0	2.4	59.3	36.5	1.8	0.6	1.3	0.4	0.02	0.0	0.05

ける共通歌の多さからか、語種別、品詞別の構成比率は、おおむね類似したものとなっていることがみてとれるであろう。しかし、「三奏金葉詞書」の語彙における漢語の構成比率が、異なり語数・延べ語数のいずれも「金葉詞書」のそれらに比して高いことには、多少、注意が必要であると考えるので、以下、この点についてふれたい。

漢語の異なり語数は、表（2）・表（3）に示したように、「三奏金葉詞書」で一八六語、「金葉詞書」で一六五語である。うち、共通するものは、異なり語数では一三六語、延べ語数では、「三奏金葉詞書」が三八二語、「金葉詞書」が三四八語となる。したがって、非共通語は、「三奏金葉詞書」では、異なり語数五〇語、延べ語数六八語、「金葉詞書」では、異なり語数二九語、延べ語数三〇語となる。

共通する一三六語について、「三奏金葉詞書」と「金葉詞書」との使用度数の差をみると、その多くが二以内であり、三以上のものは、一一語にすぎない。また、非共通語においては、そのほとんどが使用度数一であり、使用度数が三以上の語は、二語にすぎない。

表（4）は、共通語における使用度数差五以上、非共通語における使用度数五以上の、計八語について、「金葉詞書」「三奏金葉詞書」での使用度数をまとめたものである。以下、「三奏金葉詞書」における使用度数の方が多い語について、「だい」を中心に、いささかふれる。

「だい」は、表（4）に示したように、「三奏金葉詞書」に三五例存するが、うち、「題不知」で二九例、「題読人不知」で四例、それぞれ使用されている。この二九例の「題不知」の用例のうち、一一例が非共通歌で使用されたものである。したがって、共通歌では、「題不知」が一八例、「題読人不知」が四例使用されていることになる。この二二例のうち、「金葉詞書」でも「題不知」とするものは七例、「題読人不知」とするものは四例であり、他の一一例中、「詞書」を欠く二例を除く九例は、

例1　翫明月といへることをよめる　（二・一九九）(5)

例2　恋の心をよめる　（二・四一〇）

のように、歌題を示したり、

例3　見かはしながら恨めしかりける人によみかけける　（二・五一三）

表（4）

単語	金葉	三金
だい	22	35
だいじやうだいじん	13	19
だいり	7	20
てんとく	0	13
にふだう	1	6
びやうぶ	2	7
にようばう	13	8
ひやくしゆ	23	17

のように、詠歌の事情を示す、具体的な「詞書」となっている。

「金葉和歌集」の撰者俊頼は、二度本「金葉和歌集」の編纂に当たり、詠歌事情を徹底的に追求し、題詠歌を重視したが[6]、その結果、「金葉詞書」においては「題不知」のような形式の「詞書」が減少したのであろう。しかし、撰者俊頼は、三奏本「金葉和歌集」の編纂に当たり、二度本の革新性を後退させる過程で、類型的な「題不知」という「詞書」を復活させたのではなかろうか。このように考えると、二度本との非共通歌に「題不知」という「詞書」が一一例も存する理由も理解できるであろう。

次に、「びやうぶ」の頻用についてふれたい。

「びやうぶ」は、表（4）に示したように、「三奏金葉詞書」に七例、「金葉詞書」に二例、それぞれ存している。「三奏金葉詞書」における七例のうち五例は、非共通歌における、

例4　鷹司殿の賀の屏風に、子日したるかたかけるところをよめる　（三・二三）

例5　屏風の絵に逢坂の関かけるところをよめる　（三・一七六）

のような屏風歌に関するものであり、残りの二例も共通歌における、

例6　屏風の絵に、しかすがのわたりする人立ちわづらひたるかたかける所をよめる　（三・五七三）

のような、やはり屏風歌に関する用例である。このような点からして、「三奏金葉詞書」において撰者俊頼は、新たに撰入した屏風歌に関しては、屏風歌であることを明示する形の「詞書」を付加したと考えられる[7]。

以上の他、「だいり」「てんとく」の頻用は、後述するように、三奏本「金葉和歌集」編纂に当たっての、撰歌資料としての「天徳四年内裏歌合」重視の、「だいじやうだいじん」「にふだう」の頻用も、後述するように、「宇治入道前太政大臣」に関する和歌重視の結果と考えられる。

以上、「だい」「びやうぶ」をはじめとする漢語についてふれたが、このような語の存在が「三奏金葉詞書」の語彙における漢語構成比率を「金葉詞書」の場合とは相違させる一因となったと思われる。とするならば、漢語構成比率の相違は、撰者俊頼の、三奏本「金葉和歌集」編纂に当たっての撰歌・撰集方針の変更の結果であると言えそうである。

4

次に、「三奏金葉詞書」の基幹語彙についてふれたい。

どのようなものを、ある作品の基幹語とするかについては、基幹語という用語の定義と同様、より慎重な検討が必要であろうが、ここでは、おおむね延べ語数の一パーミル（度数四）以上の使用度数を持つ語をもって、仮に基幹語とする。

右のようなものを基幹語とすると、「三奏金葉詞書」の語彙における基幹語彙は、異なり語数で二〇三語、延べ語数で三〇一一語となる。また、延べ語数の三〇一一語は、「三奏金葉詞書」の全延べ語数四〇

九七語の七三・四九パーセントとなる。[8] 一方、「金葉詞書」の語彙の基幹語彙に関する同様な数値は、それぞれ一九四語、三一二五語、七四・〇九パーセントとなる。この二作品の数値は、共通歌が四九五首も存することからして当然のことではあるが、近似したものとなっている。なお、「三奏金葉詞書」の方が全異なり語数が少ないにもかかわらず、基幹語彙の異なり語数が多いのは、「金葉詞書」に比して高頻度語が比較的少ないことや、表現が非類型的になっていることもその一因であると考える。

三―1

次に、「三奏金葉詞書」の基幹語彙と、大野晋氏が示された「平安時代和文脈系文学の基本語彙」（以下、「平安和文基本語彙」と略称する）[9] との比較を通して「三奏金葉詞書」の語彙の性格の一端をみたい。

表（5）は、「三奏金葉詞書」および「平安時代和文脈系文学」（以下、「平安和文」と略称する）の語彙について、それぞれ累積使用率によって一〇段階に分け、「三奏金葉詞書」の基幹語彙および「平安和文基本語彙」に関する部分のみ抜き出し、前者を基準として、その所属語数を示したものである。

この表（5）から、「三奏金葉詞書」の特徴的使用語を指摘するには、様々な方法があろう。また、その方法の適否についても、慎重に検討する必要があろうが、ここでは、同様な調査を行った拙稿との関係上、一応、上、下各二段階以上の差が存するものをもって特徴的な使用語とする。

「三奏金葉詞書」の基幹語彙における特徴的な使用語を、右のような基準によるものとすると、それは、①段階一語、②段階一語、③段階三語、④段階五語、⑤段階八語、⑥段階九語、⑦段階一七語、⑧段階一六語の、計六〇語であることがわかる。以下、具体的にそれらを示すと、

Ⅰ　「三奏金葉詞書」の語彙における所属段階の方が上位の語

よむ（詠）・つかはす（遣）・まかる（罷）・いへ（家）・うた（歌）・こひ（恋）・さき（先・前）・うぢ（宇治、地名）・あそん（朝臣）・ほととぎす（時鳥）・かへし（返）・くだる（下）・ぐす（具）・てんじやう（殿上）・ふぢ（藤）

表（5）

	共通語	平安時代和文脈系文学の語彙における段階								非共通語
		1	2	3	4	5	6	7	8	
1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0
2	5	2	2	0	0	0	0	1	0	0
3	6	0	1	0	2	0	2	0	1	1
4	12	2	1	2	2	3	1	0	1	1
5	19	0	1	2	5	4	2	3	2	7
6	27	0	3	2	1	10	5	3	3	7
7	55	1	0	3	4	9	10	15	13	13
8	30	0	1	2	2	4	7	5	9	19
計	155	5	9	11	16	31	27	27	29	48

II

「平安和文」の語彙における所属段階の方が上位の語

す（為）・あり（有）・もの（物・者）・なる（成）・うへ（上）・はべり（侍）・ほど（程）・おもふ（思）・まへ（前）・いか（如何）・また（又）・みや（宮）・いづ（出）・かぜ（風）・かた（方）・たつ（立、四段）・ちゆうぐう（中宮）・はる（春）・あまた（数多）・いかが（如何）・おなじ（同）・なし（無）・ゐん（院）・あき（秋）・その（其）・たてまつる（奉、四段）・とふ（訪・問）・みゆ（見）・わたる（渡）・いる（入、四段）・うち（内・内裏）・おはします（在）・きこゆ（聞）・これ（此）・しのぶ（偲・忍）・つかひ（使）・なく（鳴、四段）・のぼる（上・登・昇）・はじめ（始）・ほか（外）・まつ（待）・みす（見）・むすめ（娘）・ゆめ（夢）・わする（忘、四段）

のようになる。

2

まず、「三奏金葉詞書」の語彙における所属段階の方が上位の語群についてふれる。

ここに所属するのは、上掲一五語であるが、かつて調査した「詞書」での同様な語群と比較すると、「古今詞書」とは七語、「後撰詞書」とは五語、「拾遺詞書」とは八語、「後拾遺詞書」とは九語、「金葉詞書」とは一二語、「詞花詞書」とは九語、「千載詞書」とは五語、「新古今詞書」とは八語、それぞれ共通している。二度本「金葉和歌集」の「詞書」と共通する語が最も多いのは当然として、前後の「後拾遺和歌集」「詞花和歌集」の「詞書」との共通語がそれに次ぐことも、やはり注目に値するものであろう。また、ここに所属する語の多くが、他の「詞書」の同様な語群と共通する中で、「てんじやう」が他と共通しない点、「ほととぎす」「ふぢ」の二語が「金葉詞書」とのみ共通する点、「うぢ」「ぐす」の二語が「金葉詞書」を含む二作品の「詞書」と共通している点も注目に値する。以下、「ほととぎす」「ふぢ」「うぢ」「てんじやう」の順にふれたい。

「ほととぎす」の用例は、「金葉詞書」に一八例、「三奏金葉詞書」に一八例使用されている。「ほととぎす」の用例が、どちらか一方、または、両方の「詞書」において使用されている一六首の共通歌をみると、「金葉詞書」に一三例、「三奏金葉詞書」では一六例使用されていることがわかる。したがって、「三奏金葉詞書」でのみ使用されている用例は、三例であり、うち一例は、二度本「金葉和歌集」において「詞書」を欠いているものである。また、他の二例は、

例7　承暦二年内裏歌合に郭公をよめる　（三・一一五）

例8　宇治前太政大臣家歌合に郭公をよめる　（三・一二二）

に対する

例9　承暦二年内裏歌合に、人にかはりてよめる　（二・一一二）

例10　宇治前太政大臣家歌合によめる　（二・一二一）

のように、二度本「金葉和歌集」において「詞書」は存するものの「ほととぎす」の用例を欠いているものである。

上述のように「ほととぎす」の使用された「詞書」を持つ和歌に多少の相違は存するものの、前稿でもふれたように[10]、二度本「金葉和歌集」における伝統的景物を取り入れた撰者俊頼の撰歌態度は、三奏本「金葉和歌集」においても維持されーむしろ強化されー、その結果、「ほととぎす」の用例が頻用されたと言えそうである。

次に、「ふぢ」の用例についてふれる。

「ふぢ」の用例は、「金葉詞書」では一〇例、「三奏金葉詞書」では九例使用されている。うち共通歌においては、それぞれ八例使用されている。したがって、非共通歌での使用例は、「金葉詞書」において二例、「三奏金葉詞書」においては一例となる。このような「三奏金葉詞書」における「ふぢ」の用例の頻用も、「ほととぎす」の用例の場合と同様、二度本「金葉和歌集」において伝統的な景物を取り入れた撰者俊頼の撰歌態度[11]と、それを受けての三奏本「金葉和歌集」における撰歌態度の結果であろう。

次に、「うぢ」についてふれる。

「うぢ」の用例は、「金葉詞書」に一六例、「三奏金葉詞書」に二三例、それぞれ存している。うち、「金葉詞書」の一五例（一四首）、「三奏金葉詞書」の一七例（一六首）は、共通歌での用例である。したがって、「三奏金葉詞書」の共通歌における一七例中二例は、「金葉詞書」で非使用[12]ということになる。

「金葉詞書」における「うぢ」の頻用について、主として、撰集資料としての「嘉保元年八月一九日前関白師実歌合」重視の結果であろう点については既に述べた[13]。では、「三奏金葉詞書」における「うぢ」の頻用はいかなる理由によるのであろうか。

「三奏金葉詞書」の「うぢ」の用例のうち、共通歌での一七例をみると、「嘉保元年八月一九日前関白師実歌合」に関するものが七例、「長元八年五月一六日関白左大臣頼通歌合」に関するもの一例、「宇治前太政大臣」というもの四例、地名に関するもの五例となり、「金葉詞書」の場合とおおむね同様である。一方、非共通歌での六例をみると、「宇治入道前太政大臣」というもの三例、「宇治前太政大臣」というもの二例、地名に関するもの一例となっている。したがって、「三奏金葉詞書」においても「金葉詞書」の場合と同様に、「嘉保元年八月一九日前関白師実歌合」の重視、また、人名としての「宇治前太政大臣（師実）」の頻用が「うぢ」の用例の頻用に関係していることがわかる。と同時に、「宇治入道前太政大臣（頼通）」に関わる用例の増加が目立つが、これは、当代性、革新性に富む二度本「金葉和歌集」を、より穏当な歌人構成とした三奏本「金葉和歌集」の撰歌方針の結果であると言える。

以上の三語および、ここではふれなかった「ぐす」に関して、その頻用の理由は「金葉詞書」の場合と概ね同様であると考えられる。しかし、「てんじやう」の場合はどのように考えたらよいのであろうか。以下、「てんじやう」についてふれたい。

「てんじやう」の用例は、「金葉詞書」に七例、「三奏金葉詞書」に九例、それぞれ使用されている。以下、その使用実態を具体的にみて

いく。

共通歌においては、

例11　永承四年殿上根合に、菖蒲をよめる　（二・一二八）

例12　永承四年殿上歌合に菖蒲をよめる　（三・一二七）

や、

例13　承暦二年御前にて、殿上の御をのこども題を探りて歌つかうまつりけるに…　（二・二五七）

例14　承暦二年、御前にて殿上のをのこどもくさり題して歌つかうまつりけるに…　（三・二五九）

のような用例が、それぞれ六例存する。また、共通歌に関するものの中には、

例15　題不知　（二・二〇九）

例16　大炊殿におはしましける頃、殿上のをのこども御前にて歌つかうまつりけるに　（三・二〇三）

や

例17　堀河院御時、殿上人あまた具して花見に歩きけるに、…　（二・五二二）

例18　堀河院の御時、殿上の人々あまた具して花見ありきける、…　（三・五一三）

のように、「三奏金葉詞書」にのみ「てんじやう」の使用されたものも存する。

非共通歌における使用例は、

例19　選子内親王いつきにおはしましける時、…殿上の御簾にむすびつけける歌　（二・二九三）

例20　堀河院御時、御前にて殿上のをのこども題をさぐりて…　（三・五四五）

というものである。

以上の「金葉詞書」および「三奏金葉詞書」における「てんじやう」の用例には、歌合の明示に使用された用例、場所や地位を示す用例がともに存し、「三奏金葉詞書」に「堀河院の御時…」とする「詞書」中での用例が二例存するほかは、特に相違はみうけられない。[14]

上述のような「てんじやう」の用法が一般的なものなのかどうかを検討するために、前後の「詞書」である「後拾遺詞書」「詞花詞書」における「てんじやう」の用例をみることにする。

「後拾遺詞書」では、

例21　永承六年五月殿上根合に、さなへをよめる（後拾・二〇五）

例22　後三条院東宮とまうしけるとき、殿上にて人人としのくれぬるよしをよみ侍けるに　（後拾・四二三）

例23　八月ばかりに、殿上のをのこどもをめしてうたよませ給けるに、旅中聞雁といふこころを　（後拾・二七七）

のように、「金葉詞書」および「三奏金葉詞書」とほぼ同様な使用法となっている。一方、「詞花詞書」では、

例24　新院殿上にて海路月といふことをよめる　（詞花・二九三）

例25　四位して殿上おりて侍けるころ、鶴鳴皐といふ事をよめる

（詞花・三四六）

のように、歌合の明示に使用された用例は存しないものの、「金葉詞書」や「三奏金葉詞書」と大差ない使用法となっていると言えそうである。また、八代集の他の「詞書」においても、おおむねこれらと同様なものであると言える。

ところで、「金葉詞書」および「三奏金葉詞書」をみると、例13、例14、例16、例20の「てんじやうの（御）をのこども」、および、それに類似した例18の「てんじやうのひとびと」のような用例が存することに気づかされる。これらは、

例26　うへのをのこどもうたよみ侍けるに、春心花によすといふ　ことをよみはべりける

（後拾・九五）

例27　二条院御時、上の男ども百首歌奉りける時、詠める

（千載・六七〇）

と同類の表現である。この例26、例27と同類の表現が「金葉詞書」に一例、「三奏金葉詞書」に四例存することは注目に値する。

表（6）は、八代集および三奏本「金葉和歌集」の「詞書」における「てんじやう」と「うへのをのこども」の使用度数をまとめたものである。なお、括弧内の数字は、「てんじやう」の用例のうち、「うへのをのこども」に類似した表現と思われるものに使用された用例数である。

表（6）

	古今	後撰	拾遺	後拾	金葉	三金	詞花	千載	新古
てんじやう	1	5(2)	6(6)	7(3)	7(1)	9(4)	2	3	3
うへのをのこども	2	1	0	12	0	0	6	11	6

この表（6）をみると、「てんじやう」は、「後撰詞書」から「三奏金葉詞書」にかけて比較的多く使用されていることがわかる。一方、「うへのをのこども」という表現は、「後拾遺詞書」を例外として、「てんじやう」の用例の少ない「古今詞書」「詞花詞書」「千載詞書」「新古今和歌集」において「てんじやう」より使用度数が多いことや、「金葉詞書」および「三奏金葉詞書」において使用されていないこともわかる。

以上のような点から考えると、「三奏金葉詞書」において「てんじやう」という用例が頻用される理由の一つとして、「うへのをのこども」の代替形である「てんじやうのをのこども」、および、その類似表現での使用という点が指摘できそうである。とするならば、この「三奏金葉詞書」における「てんじやう」の頻用は、「詞書」の表現形式の伝統を踏まえた撰者俊頼の撰集態度の結果であるとも言えそうである。

3

次に、「平安和文」の語彙における所属段階の方が上位の語群についてふれる。

ここに所属するのは、上掲四五語であるが、かつて調査した「詞書」での同様な語群と比較すると、「古今詞書」とは二五語、「後撰詞書」とは二〇語、「拾遺詞書」とは一六語、「後拾遺詞書」とは一七語、

「金葉詞書」とは三三語、「詞花詞書」とは二六語、「千載詞書」とは二三語、「新古今詞書」とは二一語、それぞれ共通していることがわかった。

「平安和文」の語彙における所属段階の方が上位の語群に所属しているものの多くは、上述のように、他の「詞書」における同様な語群の所属語と共通している。しかし、中には「はる」「あき」「たてまつる」のように、他の一作品の「詞書」とのみ共通するものも存する。これらの語は、他の多くの「詞書」においては特異な用例とはみなされておらず、「三奏金葉詞書」の語彙の性格を、本当の意味で物語るものであるとも言えよう。以下、前稿でふれた[15]「たてまつる」をのぞき、「はる」「あき」の順に、いささかふれることにする。

「はる」の用例は、「金葉詞書」に八例、「三奏金葉詞書」に七例、それぞれ存するが、うち、二度本「金葉和歌集」と三奏本「金葉和歌集」の共通歌の「詞書」において五例使用されている。したがって、非共通歌の「詞書」における使用は、「金葉詞書」に三例、「三奏金葉詞書」に二例、それぞれ存することになる。この「金葉詞書」および「三奏金葉詞書」における用例で特徴的なことは、

例28　早春の心をよめる　（二・六）
例29　春の田をよめる　（二・七三）
例30　はるの雪をよめる　（三・九）
例31　天徳四年内裏歌合に暮春の心をめる　（三・九五）

のように、歌題と思われる部分での使用が目立つということである。同様な用例は、「金葉詞書」には、他に三例、「三奏金葉詞書」には、他に二例、それぞれ存している。

上述の点について比較するために、前後の勅撰集の「詞書」である、「後拾遺詞書」「詞花詞書」における「はる」の用例の使用実態をみることにする。

まず、「後拾遺詞書」をみると、一八例の「はる」の用例のうち、

例32　春はひむがしよりきたるといふ心をよみ侍ける　（後拾・三）
例33　堀川右大臣の九条家にて、山ごとにはるありといふこころをよみはべりける　（後拾・一〇六）

のような歌題に関するものは七例存しているが、比率からすると、「金葉詞書」および「三奏金葉詞書」の場合より低い[16]ことがわかった。また、「春の部」での用例は一〇例と、「金葉詞書」の六例、「三奏金葉詞書」の五例よりも、比率において低い[17]こともわかった。

次に、「詞花詞書」をみると、「はる」の用例は九例存する。うち、歌題に関するものとしては、

例34　老人惜春といふ事をよめる　（詞花・四七）

のような用例が四例存する。また、「春の部」での用例は三例である。これらのことから、「詞花詞書」の「はる」の用例に関しても、「後拾遺詞書」の場合と同様に、詠歌の事情等の説明部分での用例や、「春の部」以外での用例の比率が、「金葉詞書」および「三奏金葉詞書」の場合よりも高い[18]ことがわかる。

以上、「はる」の使用例についてふれた。その結果、「三奏金葉詞

書」においてー「金葉詞書」においても同様であるがー「はる」の用例は、前後の勅撰集の「詞書」に比して、歌題に関して使用される比率が高い、という傾向の存することがわかった。これは、諸先学も説かれる撰者俊頼の題詠歌重視の姿勢[19]が関係しているのかもしれない。

次に、「あき」の用例についてふれたい。

「あき」の用例は、「金葉詞書」に一〇例、「三奏金葉詞書」に五例、それぞれ存する。二度本「金葉和歌集」と三奏本「金葉和歌集」の「詞書」のどちらか一方、または、両方に「あき」の使用例が存する共通歌は五首であるが、うち、「金葉詞書」には四例、「三奏金葉詞書」には三例の「あき」の用例が使用されている。したがって、非共通歌での使用は、「金葉詞書」で六例、「三奏金葉詞書」で二例となる。

「金葉詞書」の一〇例中七例、「三奏金葉詞書」の五例中三例の「あき」の用例が、

例35　秋隔一夜といへることを　（二・一五五）

例36　雨中秋尽といへる事をよめる　（三・二五八）

のような歌題中での使用例である。また、部立ての面でみると、「金葉詞書」では七例、「三奏金葉詞書」では四例が、「秋の部」での用例であることもわかる。

次に、「はる」の場合と同様に、前後の勅撰集の「詞書」である、「後拾遺詞書」「詞花詞書」における「あき」の用例の使用実態についてふれる。

まず、「後拾遺詞書」についてみると、二五例の「あき」の用例のうち、

例37　俊綱朝臣のもとにて、晩涼如秋といふをよみ侍ける　（後拾・二三一）

例38　毎家有秋といふこころを　（後拾・三一五）

のような歌題中の用例とみなされるものは、一二例存していることがわかる。また、「秋の部」で一三例、「秋の部」以外で一二例、それぞれ使用されていることもわかった。

次に、「詞花詞書」の三例の「あき」の用例をみると、すべて

例39　春より法輪にこもり侍ける秋、大井河に紅葉のひまなくながれけるをみてよめる　（詞花・一三二）

のように、詠歌の事情等の説明部分での使用例であり、歌題と思われる部分に使用された用例は存しないことがわかった。また、部立てに関してみると、「秋の部」で一例、「秋の部」以外で二例、それぞれ使用されていることもわかる。

以上、「三奏金葉詞書」における「はる」および「あき」の使用例をみてきた。「三奏金葉詞書」の「はる」「あき」の用例は、前後の「後拾遺詞書」「詞花詞書」における当該例の使用実態と比較すると、

1　詠歌の事情等を説明する部分での使用例が少ない

2　歌題中での使用例が比較的多い

3　「春の部」または「秋の部」において多く使用されている

のような特徴が存する。このような点が「三奏金葉詞書」の「はる」「あき」の用例が「平安和文」の語彙における所属段階との比較にお

表（7）

	共通語	「金葉詞書」の語彙における段階								非共通語
		1	2	3	4	5	6	7	8	
1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
2	5	0	2	3	0	0	0	0	0	0
3	7	0	1	3	3	0	0	0	0	0
4	13	0	0	1	7	5	0	0	0	0
5	24	0	0	0	0	13	10	1	0	2
6	33	0	0	0	0	1	22	8	2	1
7	55	0	0	0	0	0	10	41	4	13
8	33	0	0	0	0	0	2	17	14	16
計	171	1	3	7	10	19	44	67	20	32

いて、他の「詞書」の場合と相違し、特異な用例であるとみなされる因となっていると思われる。換言すると、これらの語の特異性は、題詠歌を重視する撰者俊頼の編纂態度の結果であるとも言い得よう。

四―1

表（7）は、三―1において行ったのと同様な段階分けを「三奏金葉詞書」「金葉詞書」の語彙について行い、「三奏金葉詞書」の基幹語彙および「金葉詞書」の基幹語彙に関する部分のみ抜き出し、前者を基準として、その所属語数を示したもの[20]である。

この表（7）からもわかるように、「三奏金葉詞書」の基幹語彙と「金葉詞書」の基幹語彙との間には、共通歌の多さも理由となり、特異な使用語と思われるものは、ほとんど存しない。しかし、少ないながらも「三奏金葉詞書」における所属段階の方が上位の、だいり（内裏）・おもふ（思）・まつ（松）の三語、「金葉詞書」における所属段階の方が上位の、みす（見）・よす（寄）の二語を、それぞれ特異な使用語として指摘することができよう。以下、「だいり」と「おもふ」について具体的にその使用実態をみることにする。

2

「だいり」の用例は、「金葉詞書」に七例、「三奏金葉詞書」に二〇例、それぞれ存する。うち、共通歌六首において、「金葉詞書」では五例、「三奏金葉詞書」では六例、それぞれ使用されている。したがって、非共通歌において使用されているのは、「金葉詞書」で二例、「三奏金葉詞書」で一四例となる。「三奏金葉詞書」における一四例のうち一二例は、

例40　天徳四年内裏の歌合によめる　（三・三）

例41　天徳四年内裏の歌合に郭公をよめる　（三・一一七）

のような、「天徳四年内裏歌合」に関するものであり、残りの二例は、

例42　六条内裏にて子日せさせ給けるによめる　（三・二四）

例43　寛和二年内裏歌合に月をよませ給へる　（三・一六八）

というものである。したがって、「三奏金葉詞書」における「だいり」の頻用は、三奏本「金葉和歌集」編纂に当たっての撰歌資料としての「天徳四年内裏歌合」の重視の結果であると言える。なお、「三奏金葉詞書」において一六例、「金葉詞書」において三例使用されている「よねん」の例も、同様な理由による頻用である。

次に、「おもふ」についてふれることにする。

「おもふ」の用例は、「金葉詞書」に四例、「三奏金葉詞書」に一〇例、それぞれ存している。うち、「金葉詞書」における四例をみると、三奏本「金葉和歌集」との共通歌の「詞書」で三例、非共通歌の「詞書」で一例、それぞれ使用されている。また、共通歌での三例中、「三奏金葉詞書」にも「おもふ」の存するものは二例、存しないものは一例となっている。一方、「三奏金葉詞書」における一〇例を中心にみると、二度本「金葉和歌集」との共通歌の「詞書」で四例（うち、「金葉詞書」においても使用されているものは、上述したように二例）、非共通歌の「詞書」で六例、それぞれ使用されている。

「三奏金葉詞書」における「おもふ」の使用例で特徴的なのは、二度本「金葉和歌集」との非共通歌の「詞書」において、

例44　もの思ひ侍りける時よめる　（三・四一九）

のような「もの思ひ侍り」という例が二例、

例45　思ふこと侍りける頃雨の降るを見て　（三・五〇九）

のような「思ふことあり（侍り）」という例が二例（他に、共通歌の「詞書」中に一例）存するということである。うち、「もの思ひ侍り」の二例は「恋の部」で、「思ふことあり（侍り）」の例は、共通歌の「詞書」での一例を含め三例とも「雑の部」で使用されている。

「おもふ」の用例について、前後の勅撰集の「詞書」である、「後拾遺詞書」「詞花詞書」での使用実態をみると、それは、「後拾遺詞書」に三三例、「詞花詞書」に六例、それぞれ存することがわかる。これらのうち、「もの思ひ侍り」「思ふことあり（侍り）」と、その類似表現についてみると、「後拾遺詞書」においては、「もの思ひ侍り」が「恋の部」に二例、「雑の部」に一例、「思ふことあり（侍り）」が「雑の部」に二例、また、「詞花詞書」においては、「思ふこと侍り」が「雑の部」に一例、それぞれ存していることがわかる。このような点からして、「三奏金葉詞書」における「もの思ひ侍り」や「思ふことあり（侍り）」のような表現は、和歌史上の類型化された表現の一つであると言え、そのような表現が「三奏金葉詞書」に比較的多くみられるのは、革新性という点で二度本よりも後退させた三奏本「金葉和歌集」の編纂態度とも合致するものであったからであると言えよう。

五―1

次に、二度本「金葉和歌集」と三奏本「金葉和歌集」との共通歌の「詞書」の語彙についてみることにする。

共通歌四九五首の「詞書」の語彙における異なり語数、延べ語数は、「金葉詞書」においては、それぞれ八八九語、三三二三語、「三奏金葉詞書」においては、それぞれ八七八語、三二二二語となる。うち、共通しないものは、異なり語数で一九一語。「金葉詞書」でのみ使用されているものは、異なり語数で一〇一語、延べ語数で一一〇語、「三奏金葉詞書」でのみ使用されているものは、異なり語数で九〇語、延べ語数で九六語となる。この共通しない語は、異なり語数と延べ語数との関係からもわかるように、多くは使用度数一の語である。

次に、共通する七八八語（延べ語数は、「金葉詞書」三二一三語、「三奏金葉詞書」三一二六語）についてみると、うち、五九四語は「金葉詞書」と「三奏金葉詞書」での使用度数が等しい。また、「金葉詞書」での使用度数の方が「三奏金葉詞書」での使用度数より一多いものが七一語、二多いものが二二語、三多いものが三語、四以上多いものが七語[21]、「三奏金葉詞書」での使用度数の方が「金葉詞書」での使用度数より一多いものが七〇語、二多いものが一三語、三多いものが四語、四以上多いものが四語[22]であることもわかった。

共通する語の多くは二つの「詞書」での使用度数が等しいか、その差が三以内であることは、上述の通りであるが、以下、その差が四以上の語のうち、「こひ」と「こころ」について、その使用実態を具体的にみることにする。

2

まず、「こひ」の用例からふれることにする。

「金葉詞書」または「三奏金葉詞書」の一方、または両方に「こひ」の用例が使用された共通歌は三六首存する。「こひ」の使用度数は、「金葉詞書」では三四、「三奏金葉詞書」では二八であるが、それらは、

例46　恋の心を人〳〵のよみけるに、よめる　（二・四〇三）

例47　恋の心を人々よみけるに　（三・四一四）

のように、「金葉詞書」「三奏金葉詞書」のいずれにおいても「こひのこころ」となっているもの、

例48　顕季卿家にて、寄織女恋といふ心をよめる　（二・三六三）

例49　顕季卿家にて寄七夕恋の心をよめる　（三・三六六）

のように、一方が「…こひといふこころ」、他方が「…こひのこころ」となっているもの、

例50　たのめてあはぬ恋の心をよめる　（二・三六七）

例51　頼めてあはぬ恋といへることを　（三・三八二）

のように、一方が「…こひのこころ」、他方が「…こひといへる（いふ）こと」となっているもの、

例52　恋の心をよめる　（二・三八三）

例53　恋の歌とてよめる　（三・三九九）

のように、一方が「こひのこころ」、他方が「こひのうた」となっているもの、

例54　後朝恋の心をよめる　（二・三八一）

例55　後朝の心を　（三・三九八）

のように、一方に「こひ」の語が存しないもの等、その使用実態は多彩である。

右のような「金葉詞書」「三奏金葉詞書」における「こひ」の用例について、形式上まとめたものが表（8）である。この表（8）でわかるように、「金葉詞書」においては「こひのこころ」という用法を中心に、全三四例の六七・六パーセントに当たる二三例が「こころ」とともに用いられている。これに対し、「三奏金葉詞書」においては、

表（8）

	金葉	三金
恋の心	11	5
…の恋の心	3	4
…恋の心	6	3
…恋といふ心	2	0
…恋といへる心	1	0
…の恋といふこと	0	1
…恋といふこと	0	1
…の恋といへること	2	0
…恋といへること	2	5
恋の歌	5	7
…の恋	1	0
恋	1	2
詞書なし・題しらず	2	8

表（9）

	金葉	三金
恋の心	11	1
…の恋の心	2	0
…恋の心	1	0
…恋といふ心	0	0
…恋といへる心	0	0
…の恋といふこと	0	0
…恋といふこと	0	0
…の恋といへること	1	0
…恋といへること	6	0
恋の歌	8	2
…の恋	1	0
恋	1	1
詞書なし・題しらず	0	0

同様のものは、全用例二八例の四二・九パーセントに当たる一二例にすぎない。

次に、非共通歌における「こひ」についてふれる。

非共通歌をみると、「こひ」の使用度数は、「金葉詞書」において三一（二九首）、「三奏金葉詞書」において四（四首）である。これらの用例について、共通歌における場合と同様に分類したのが表（9）である。この表（9）からも、「金葉詞書」においては、共通歌の場合と同様に、「こころ」とともに用いられた用例が、他の形式よりも多いことがわかる。

井上宗雄氏は、その論文において、「金葉和歌集」の「詞書」では「…心を詠める」が激増し、「金葉詞書」では二一パーセント強、「三奏金葉詞書」では一〇パーセント強となることを指摘されたが、[23]「金葉和歌集」の「詞書」における「こひ」と「こころ」の結びつきの強さも、このような「心を詠める」の激増に関係しているのであろう。ただ、「金葉詞書」に比し、「三奏金葉詞書」において、それが減少しているのは、いかなる理由によるのであろうか。この点については、今後とも考えたい。

3

次に、「こころ」の用例についてふれる。

共通歌・非共通歌全体でみると、「こころ」の使用度数は、「金葉詞書」では一一六、「三奏金葉詞書」では六五となる。また、共通歌での使用度数をみると、「金葉詞書」では八一となるが、うち、「三奏金葉詞書」にもそのまま使用されたものは四〇、別語で言い換えられたものや使用されていないものが四一となっている。一方、「三奏金葉詞書」を中心にみると、共通歌での使用度数は五〇となる。うち、「金葉詞書」でも使用されていたものは、上述のように四〇、「三奏金葉詞書」で新たに使用されたものが一〇となる。

ところで、後藤重郎氏は、二度本「金葉和歌集」と三奏本「金葉和歌集」における「こころ」を使用した「詞書」について考察し、

三奏本においては、再撰本と同じくA型即ち「通常の歌題＋の心を」の形をとるのが殆んどで、B型（筆者注、「…といへる（い

ふ）心を」の形をとるもの）としては…（筆者注、引用詞書省略）…の一首があるのみにて、C型（筆者注、A、B型以外）は○となり、再撰本よりもすっきりした形となってゐる[24]

とされた。また、「心をよめる」に対して使用される「ことをよめる」という形式について、二度本「金葉和歌集」、三奏本「金葉和歌集」のいずれにおいても「四季の部」の「詞書」に多く使用され、「恋の部」を除き、三奏本「金葉和歌集」の「冬の部」の「詞書」を例外として、D型（「こと」の上が二つ〈以上〉の観念が結合して名詞の題となっているもの）よりもE型（「こと」の上が完結した文をなしているもの）の方が多いとされた。[25] この後藤氏の高論の学恩を蒙りつつ、「金葉詞書」と「三奏金葉詞書」における「こころ」の使用実態について、以下、具体的にみることにする。

まず、二度本「金葉和歌集」と三奏本「金葉和歌集」との共通歌で、「金葉詞書」では使用され、「三奏金葉詞書」では非使用となっている用例についてふれる。

「金葉詞書」において使用され、「三奏金葉詞書」において非使用となっている「こころ」の用例は、上述したように四一例存するが、それらは、

例56　実行卿家の歌合に、霞の心をよめる　（二・九）
例57　（詞書ナシ）　（三・五）

のように、三奏本「金葉和歌集」において「詞書」を欠くもの、

例58　祝の心をよめる　（二・三一二）
例59　題不知　（三・三一七）

のように「題不知」となっているもの、

例60　摂政左大臣家にて夏月の心をよめる　（二・一四一）
例61　摂政左大臣家にて夏月をよめる　（三・一三六）

のように、「…のこころ」を欠くもの、

例62　夏月の心をよめる　（二・一五二）
例63　夏夜月をよめる　（三・一四三）

のように、歌題が相違するもの、

例64　後冷泉院御時、弘徽殿女御の歌合に、苗代の心をよめる　（二・七五）
例65　後冷泉院御時、弘徽殿女御歌合によめる　（三・七七）

のように、歌題そのものを欠くもの、

例66　鳥羽殿にて人〳〵歌つかうまつりけるに、卯花のこゝろをよめる　（二・九八）
例67　鳥羽殿にて人々卯花の歌よみけるに　（三・一〇三）

のように、「こころ」が「うた」に置換しているもの、

例68　寄石恋といふ心をよめる　（二・五〇八）
例69　寄石恋といへる事を　（三・四八三）

のように、「こころ」が「こと」に置換しているもの、等に分類可能であるが、中心は、例61、例65、例63であると思われる。この例61と同様な用例が計九例（A）、例65と同様なものが計一四例（B）、例63と同様な例が計三例（C）、それぞれ存する。以下、これらの「詞書」

を持つ和歌の主な他出文献名を、川村晃生・柏木由夫・工藤重矩氏校注『金葉和歌集　詞花和歌集』（新日本古典文学大系9　平成一年九月。岩波書店）の学恩を蒙りつつあげると、以下のようになる。

A　新時代不同歌合（三・一三六）[26]・長治元年五月二十六日左近衛権中将俊忠歌合（三・一三七）・天喜四年四月三十日皇后宮寛子春秋歌合（三・一七五）・寛治三年八月二十三日庚申太皇太后宮寛子扇歌合（三・二五五）・堀川百首（三・二八三）・堀川百首（三・二九九）・新時代不同歌合（三・三〇六）他出文献不明（三・一三八）（三・一四〇）

B　長久二年二月十二日弘徽殿女御生子歌合（三・七七）・長元八年五月十六日関白左大臣頼通歌合（三・一九五）・寛治三年八月二十三日庚申太皇太后宮寛子扇歌合（三・一九六）・永承四年十一月九日内裏歌合（三・二〇五）・嘉保元年八月十九日前関白師実歌合（三・二八六）・永承五年十一月修理大夫俊綱歌合（三・三一六）・長久二年二月十二日弘徽殿女御生子歌合（三・三一九）・嘉保元年八月十九日前関白師実歌合（三・三二九）・永久四年六月四日参議実行歌合（三・三三二）・天喜四年四月三十日皇后宮寛子春秋歌合（三・三三五）・永久四年六月四日参議実行歌合（三・三九一）・永久四年四月四日白河院鳥羽殿北面歌合（三・四二八）・寛治七年五月五日郁芳門院媞子内親王根合（三・四三五）・康和二年四月二十八日宰相中将国信歌合（三・四四三）

C　元永元年六月二十九日右兵衛督実行歌合（三・一三九）・元永二年七月十三日内大臣忠通歌合（三・一六六）・他出文献不明（三・一四三）

以上のようになるが、これからみる限りでは、「三奏金葉詞書」において「こころ」の省略された和歌と、その他出文献との間には、必ずしも明確な傾向は存しない。強いてあげれば、

1　Aには「新時代不同歌合」「堀河百首」からのものが、それぞれ二首存する

2　Bには「長久二年二月十二日弘徽殿女御生子歌合」「嘉保元年八月十九日前関白師実歌合」からのものが、それぞれ二首存するという程度であり、他に、A・Bにまたがる「天喜四年四月三十日皇后宮寛子春秋歌合」「寛治三年八月二十三日庚申太皇太后宮寛子扇歌合」からのものが、それぞれ二首存するということくらいであろう。

部立ての面からみると、Aの「詞書」を持つ和歌九首は、すべて「四季の部」に属し、Bは、「四季の部」に五首、「賀の部」に五首、「恋の部」に四首、それぞれ属し、Cの三首は、すべて「四季の部」に属している。

次に、二度本「金葉和歌集」と三奏本「金葉和歌集」との共通歌で、「三奏金葉詞書」において新たに「こころ」が加わった用例についてふれる。

ここに該当する「詞書」を持つ和歌一〇首の主な他出文献名を示すと、

新時代不同歌合（三・九三）・天永元年四月二十九日右近衛中将師時山家五番歌合（三・一三二）・永久三年十月二十六日内大臣忠通前度歌合（三・三〇七）・宝物集、撰集抄（三・四四九）・肥後集（三・六二三）・他出文献不明（三・一九八）（三・三〇九）（三・三二八）（三・三六五）（三・三九六）

のようになり、上掲したA・B・Cの場合と比較すると、他出文献不明の和歌が多いことがわかる。また、「三奏金葉詞書」で「こころ」が省略された例の存する「新時代不同歌合」を他出文献とする和歌の「詞書」に、新たに「こころ」が加わったことも注目に値する。なお、部立ての面からみると、「四季の部」に五首、「賀の部」に一首、「恋の部」に三首、「雑の部」に一首、それぞれ属していることがわかる。

次に、二度本「金葉和歌集」と三奏本「金葉和歌集」との共通歌で、「金葉詞書」「三奏金葉詞書」において、ともに「こころ」が使用された用例についてふれる。

ここに該当する「詞書」を持つ和歌四〇首のうち、歌題に関係しない「こころ」の用例の存する三首を除いた、三七首と他出文献に関して、その使用実態を箇条的に示すと、以下のようになる。

1　他出文献が不明なもの　一四首

2　百首歌・歌合を他出文献とするもの

ア　堀河百首　六首

イ　新時代不同歌合　二首

ウ　天喜四年四月三十日皇后宮寛子春秋歌合　二首

エ　嘉保元年八月十九日前関白師実歌合　一首

オ　永久四年六月四日参議実行歌合　一首

カ　康和四年閏五月二日・同七日内裏艶書歌合　一首

3　2以外を他出文献とするもの　一〇首

以上のうち、ア～オは「三奏金葉詞書」において「こころ」非使用となった、上掲A・B・Cと共通し、イは、「三奏金葉詞書」において「こころ」が新たに加わったものとも共通する。また、部立ての面からみると、「四季の部」に一九首、「別離の部」に一首、「恋の部」に一〇首、「雑の部」に七首、それぞれ属していることがわかる。

以上、「三奏金葉詞書」において「こころ」が省略された用例を中心に、他出文献との関係からみてきた。その結果、「こころ」が省略された「詞書」を持つ和歌の多くには、他出文献として歌合・百首歌が存することがわかった。一方、「こころ」が使用される「詞書」を持つ和歌は、他出文献不明のものが多いという傾向もみいだせた。しかし、他出文献が存する和歌のみでみた場合、「こころ」の使用・非使用と出典との間に、特異な関係はみいだせなかった。また、部立ての関係からすると、使用・非使用ともに「四季の部」でのものが多く、特に、非使用のものにおいてその傾向が顕著であることがわかった。

二度本「金葉和歌集」と三奏本「金葉和歌集」との共通歌における「こころ」という用例の使用実態をみると、「…の心を」という形式を中心に考えた場合、後藤氏も言われるように[27]、「こころ」の使用度

数の少なさも関係してか、三奏本の方がすっきりしたものになっているようにも思える。また、井上氏のご指摘のように[28]、何らかの詞書の統一が図られたと思われるような傾向もみうけられた。しかし、二度本「金葉和歌集」と三奏本「金葉和歌集」との共通歌における「詞書」の形式の変更が、いかなる基準によって行われているかについては、明確に指摘し得なかった。あるいは、当代歌人の詠歌を多数撰入した革新的な歌集であった二度本「金葉和歌集」―その結果として激増した「心をよめる」という形式の「詞書」を、革新性を薄めた、穏やかな詠風の歌集である三奏本「金葉和歌集」を撰進するに当たって意図的に改変したのかもしれない。しかし、そうであったとしても、この改変がどのような基準によって行われたかについては、依然として明確ではない。この点に関しては今後とも考えていきたい。

六

以上、「三奏金葉詞書」の自立語語彙に関して、「金葉詞書」の自立語語彙との比較を中心にし、いくつかの観点から、その使用実態をみてきたが、その要点を再掲することにより、本稿のまとめとしたい。

1　「三奏金葉詞書」の自立語語彙における異なり語数・延べ語数は、それぞれ九九一語、四〇九七語となる。また、平均使用度数は四・一三となる。

2　延べ語数の一パーミル以上の使用度数をもつ語を基幹語とすると、「三奏金葉詞書」のそれは、異なり語数で二〇三語、延べ語数で三〇一一語となる。また、この三〇一一語は、全延べ語数四〇九七語の七四・〇九パーセントに当たる。

3　品詞別構成比率に関してみると、「三奏金葉詞書」の語彙における漢語のそれが、異なり語数・延べ語数のいずれにおいても、「金葉詞書」に比して高いものとなっている。その理由の一つとして、「だい」「びやうぶ」「だいり」「てんとく」などの語の頻用が考えられるが、これらの語の頻用は、三奏本「金葉和歌集」編纂に当たっての撰者俊頼の撰歌・撰集方針の変更の結果であると言えそうである。

4　「三奏金葉詞書」の語彙と「後拾遺詞書」「詞花詞書」の語彙との類似度D'は、「金葉詞書」の語彙とそれらの語彙との類似度D'よりも高い。この類似度の差に、二度本「金葉和歌集」の革新性と、三奏本「金葉和歌集」の保守的性格をみてとることができるであろう。

5　「三奏金葉詞書」において特徴的な「てんじやう」という語の頻用は、「詞書」の伝統を踏まえた「てんじやうのをのこども」という表現形式を使用した撰者俊頼の撰集態度の結果であると言えそうである。

6　「三奏金葉詞書」における「だいり」という語の頻用は、三奏本「金葉和歌集」編纂に当たっての撰歌資料としての「天徳四年内裏歌合」重視の、また、「おもふ」という語の頻用は、革新性という点で二度本よりも後退させた三奏本「金葉和歌集」の編纂

方針の結果であると言えそうである。

7　「こころ」という語は、「金葉詞書」と比較した場合、「三奏金葉詞書」において使用度数が減少している。この減少は、革新性を薄めた、穏やかな詠風の歌集である三奏本「金葉和歌集」を撰進するに当たり、撰者俊頼が意図的に「詞書」を改変した結果であると思われる。

大略、以上のようにまとめることができるであろう。本稿ではなし得なかった意味分野別構造分析法[29]等によれば、「三奏金葉詞書」の語彙の別の特徴も見いだせるであろうが、この点に関しては、今後の課題としたい。

	異なり	延べ	平均使用度数
古今詞書	882	3,918	4.44
後撰詞書	1,276	7,003	5.49
拾遺詞書	1,287	5,203	4.04
後拾遺詞書	1,572	9,007	5.73
金葉詞書	976	4,218	4.32
詞花詞書	719	2,651	3.69
千載詞書	1,252	7,012	5.60
新古今詞書	1,427	7,945	5.57

［注］

1　大曾根章介氏他編『日本古典文学大事典』（平成一〇年六月、明治書院）の「金葉和歌集」の項（川村晃生氏担当）、川村晃生・柏木由夫氏「『金葉和歌集』解説」（川村晃生・柏木由夫・工藤重矩氏校注『金葉和歌集　詞花和歌集』新日本古典文学大系9　平成一年九月、岩波書店）等参照。

2　拙稿「『金葉和歌集』の『詞書』の語彙について」（小久保崇明氏編『国語国文学論考』平成一二年四月、笠間書院）。

3　拙稿a「『古今和歌集』詞書の語彙について」（『湘南文学』一七号、昭和五八年三月）、拙稿b「『後撰和歌集』の『詞書』の語彙について」（『此島正年博士喜寿記念国語語彙語法論叢』昭和六三年一〇月、桜楓社）、拙稿c「『拾遺和歌集』の『詞書』の語彙について」（『城西大学女子短期大学部紀要』八巻一号、平成三年一月）、拙稿d「『後拾遺和歌集』の『詞書』の語彙について」（『城西大学女子短期大学部紀要』一二巻一号、平成七年一月）、拙稿e「『詞花和歌集』の『詞書』の語彙について」（『城西大学女子短期大学部紀要』一〇巻一号、平成五年一月）、拙稿f「『千載和歌集』の『詞書』の語彙について」（『城西大学女子短期大学部紀要』九巻一号、平成四年一月）、拙稿g「『新古今和歌集』の『詞書』の語彙について」（『湘南文学』一九号、昭和六〇年三月）、（2）拙稿。

以下、各和歌集の「詞書」ついては、それぞれ前掲拙稿による。ただし、語数・比率等に関しては、調査対象範囲および読み方等の変更による再調査の結果、その数値等に一部異同が存する。

上表は、各「詞書」の平均使用度数をまとめたものである。

4　「用語類似度による歌謡曲仕訳『湯の町エレジー』『上海帰りのリル』及びその周辺」（『計量国語学』一二巻四号、昭和五五年三月）、『数理言語学』（昭和五七年一月、培風館）、その他。

5　本文の引用は、「三奏金葉詞書」は前掲書、「後拾遺詞書」は川村晃生氏校注『後拾遺和歌集』（平成三年三月、和泉書院）、「詞花詞書」は松野陽一氏校注『詞花和歌集』（昭和六三年九月、和泉書院）、「千載詞書」は久保田淳・松野陽一氏校注『千載和歌集』（昭和四四年九月、笠

間書院）に、それぞれよる。傍線筆者、引用の後の（　）内の「二」「三」「後拾」「詞花」「千載」は、それぞれ「金葉詞書」「三奏金葉詞書」「後拾遺詞書」「詞花詞書」「千載詞書」を、その後の数字は、引用本文の歌番号（「詞花詞書」は底本の一連番号）を示す。以下、同様。

6　島田良二氏「後拾遺集と金葉集の恋歌について」（『平安文学研究』四五輯、昭和四五年一一月）、上野理氏『後拾遺集前後』（昭和五一年四月、笠間書院）、滝澤貞夫氏「金葉集の評価」（『講座平安文学論究第三輯』昭和六一年七月、風間書房）、その他。

7　滝澤氏は、（6）の論文において、題詠歌にこだわる撰者俊頼の姿勢の一つとして、本来、題詠ではない和歌の「詞書」を題詠歌の「詞書」に改変した例を具体的に指摘しておられる。三奏本においては、そのような姿勢が後退したのかもしれない。

8　西田直敏氏は、『平家物語の文体論的研究』（昭和五三年一一月、明治書院）において、「平家物語」の基幹語彙における同様な数値を七六・四パーセントとされた。また、大野晋氏は、「平安時代和文脈系文学の基本語彙に関する二三の問題」（『国語学』八七集、昭和四六年一二月）において、「平安時代和文脈系文学の基本語彙」を示されたが、それにおける同様な数値を七九パーセントとされた。これらの数値との関係からすれば、「三奏金葉詞書」の基幹語彙の選定にも、ある程度の妥当性は存すると考える。

9　（8）大野氏論文。

10・11　（2）拙稿。

12　二度本「金葉和歌集」の五〇番歌、六〇四番歌。五〇番歌は「詞書」を欠き、六〇四番歌は、

公実卿かくれ侍て後、かの家にまかりけるに、…

のように、「詞書」は存するものの、「うぢ」を欠いている（「三奏金葉詞書」は、「…宇治の家にまかりたりけるに、…」とする）。

13　（2）拙稿。

14　「金葉詞書」にも同様な例が一例存することは、例17で示した通りである。

15　（2）拙稿。

16　「はる」の用例のうち、歌題と思われる部分で使用された用例の比率は、「金葉詞書」六二・五パーセント、「三奏金葉詞書」五七・一パーセント、「後拾遺詞書」三八・九パーセントとなる。

17　「はる」の用例のうち、「春の部」で使用された用例の比率は、「金葉詞書」七五・〇パーセント、「三奏金葉詞書」七一・四パーセント、「後拾遺詞書」五五・六パーセントとなる。

18　「詞花詞書」に使用された「はる」の用例のうち、歌題と思われる部分での使用比率、「春の部」での使用比率は、それぞれ四四・四パーセント、三三・三パーセントとなる。

19　（6）書・論文。

20　したがって、八段階所属語であっても基幹語ではないものは除いてある。なお、「三奏金葉詞書」の基幹語彙であり、かつ、「金葉詞書」の八段階所属語でありながら度数三のものは、非共通語の方に所属させているので注意が必要である。

21　いはひ（祝）・いふ（言）・こころ（心）・こひ（恋）・つき（月）・ひと（人）・よむ（詠）の七語。

22　うた（歌）・しる（知・領）・はな（花）・みる（見）の四語。

23 「『心を詠める』について―後拾遺・金葉集にみられる詞書の一傾向―」(『立教大学日本文学』三五号、昭和五一年二月)。

24 「勅撰和歌集詞書研究序説―千載和歌集を中心として―」(『講座平安文学論究　第三輯』昭和六一年七月、風間書房)。

25 (23) 論文。

26 他出文献名の後の( )内の「三」は、三奏本、「一三六」は歌番号を示す。以下、同様。

27 (24) 論文。

28 (23) 論文、「再び『心を詠める』について―後拾遺・金葉集にみられる」(『立教大学日本文学』三九号、昭和五二年一二月)。

29 田島毓堂氏『比較語彙研究序説』(平成一一年一〇月、笠間書院)、「語彙論の開発と確立―比較語彙論の進展と言語学への貢献―」(『比較語彙研究の試み　6』開発・文化叢書三六、平成一二年一二月)、その他。